

## 個と一般という概念から近代の真の姿を探る

梶井基次郎『檸檬』が表現したかったもの

梶井基次郎の『檸檬』において、「えたいの知れない不吉な塊」を「近代がもたらす個の喪失に対する不安感」と解釈してみたい。作中の「私」は不吉な塊にとられて以後、「みすばらしくて美しいもの」に惹かれている。一方、不吉な塊以前は、丸善にある舶来の小物に惹かれていた。両者の違いの核心を考えてみると、両者の決定的な差は、自分だけしか理解できない「個の価値」と、誰もが良いと認める「一般の価値」という違いなのではないか。

そもそも、近代という時代は、個人という概念を取り入れ、個性というものを礼賛し始める時代だったはずである。しかし、『檸檬』における「私」は身体感覚として、社会がそれとは真逆に推移していくことを感じる。近代がもたらす画一化の強い波を受けて、個は損なわれていく一方であった。その言語化できない個の喪失への不安が、「不吉な塊」と化したのではないか。だからこそ、「私」は「個」の美を求めて、自分だけの美の感覚の中に没入していく。おはじきを嘗めるのが享樂であるなどというのは、まさに「個」の身体感覚への傾倒といえるだろう。

その個の喪失がもたらす不安の中、八百屋で出会えた檸檬は、自分だけの「個」の美の結晶であった。「すべての善いものすべての美しいものを重量に換算してきた重さ」という表現が、自分だけの美に偶然出会うことができた高揚感をよく示している。また、檸檬にまつわる体験の中で、一般的に言われる五感の中に入らない「冷覚」という感覚にフォーカスするところも、「個」の感覚を優先していききたいという無意識の欲求が表れているといえるだろう。

檸檬を手に持ったまま最後に辿り着いた丸善においては、「檸檬」対「不吉な塊」のせめぎ合いが鮮明となる。これはまさに「私が主張する個の美」と「近代が価値を置いた一般の美（＝個の抑圧）」の代理戦争である。そこで「私」は「不吉な塊」におされつつも、ふと檸檬を画本の上に置くというアイデアを思いつ

く。積み重ねられた画本の上に檸檬を置くという構図は、ヒエラルキーの図そのものである。「一般」の美を集積し、頂点に「個」の美の結晶である檸檬が君臨する。このことは「私」は深く満足し、その構図をイメージの中で固定すべく丸善の外へ出ていくのである。小説の最後、檸檬は想像の中で爆弾と化している。この爆弾が意味するところは、美における序列の破壊、さらに言うならば価値体系自体の破壊なのではないだろうか。

檸檬が書かれたのは大正十四年である。近代という時代がある程度進展した時、鋭敏な感性を持つ「私」には、少しずつ理念と実体の矛盾が見え始めてきたのではないか。文末にある活動写真は西洋から来た新しい芸術とはいえ、やはり画一化を強く押し進める気配を持つものであった。それを奇体（IIグロテスク）と表現するあたりにも、「個」というものの価値をもって「一般」の価値を破壊しようとしたたくらみが見えてくる。